



No.7 2021.7.16

岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所

〒020-0022

岩手県盛岡市大通一丁目1-16

岩手教育会館4F 岩手県教互センター内

TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535

E-mail:j.sato8252@gmail.com

リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～

先生応援しています。



河 辺 邦 博

(IBCアナウンス学院学院長)

略
歴

1973年 IBC岩手放送入社

2015年 岩手県立大学盛岡短期大学部非常勤講師

2015年 社会福祉法人愛育園(保育園)理事長

「卑屈になるなかれ。傲慢になるなかれ。」

今から 30 年程前、私はアナウンサーとして一つのテレビ番組の司会をしました。その番組は昭和の岩手の教育史をまとめた本が出版されたのを機に企画、放送されたものです。

「岩手の教育物語」と題された本は、戦後から高度成長期に岩手県内の学校で経験した先生たちの葛藤や挑戦を記録した内容でした。



30 分のこの番組の最後に、解説のため出演していた岩教組初代書記長で、この本を出版した岩手県教育弘済会理事長をつとめていた石橋寿男さんに、私は「昭和 30 年までの教育は大変な時代だったのですね。」と問いました。

石橋さんはこう答えました。「いつでも教育というのは大変なんです。楽な時代はありません。単に教えたとか、教えられたとかということではなく、もっと人間が生きるということは何なのだというに目を向けていかなければなりません。生きるということが問題になるとき、豊かさとか貧乏とかいうことは問題にならないのです。貧乏な時代には卑屈になるなよと教え、豊かな時代は傲慢になるなよと教えなければなりません。それが我々(教師)の教育に対する願いであります。」と結びました。

時代にかかわらず、教育は何をなすべきかを話してくれたこの言葉は私の心に響きました。

「を」と「で」の違い

20年近く前、教員採用が決まったばかりの学生が私にこう言いました。「私は数学を教えるのではなく、数学で教えます。」どのような違いがあるのか尋ねると「単に教科を教えるのではなく、数学を通して生徒の成長を手助けするという意味です。」というのです。教員を志望するということは、教科を教えるという前に成長期の生徒と向き合うことが最も求められることでしょう。彼の言葉は、正鵠を射た言葉だと思いました。

小生も長年、アナウンサーを志望する学生の採用面接を担当してきました。なぜ、アナウンサーになりたいのですかと問うと、志望者の多くが「小さい頃からアナウンサーに憧れていました。」「人前で話すのが大好きなんです。」と熱く語ってくれます。

しかし、私は物足りなさを感じました。アナウンサーになることは当面の目標かもしれませんが、アナウンサーになったら何をしたいか。社会のためにどう貢献したいか。高い目標を語ってほしいと感じました。

メディアで長年取材をしていて、毎年のようにおこる社会の事象に対してそのことをどのように解釈したらよいか考えあぐねることがよくありますが、その時、学校で習ったことが大きな思考の原動力になります。学校時代の社会科では、過去の歴史からその事柄を捉える事を、国語は人々の考えを知り、数学は論理的に考える大切さを、理科は事象を事実に沿って考える習慣を、外国語は多様性を知る、そんな考え方の基本を若者は欠くべからざる教養として習っていたのではないかと気づかされます。

今日の多様性が求められる時代、「〇〇を学ぶ」を超えて「〇〇で学ぶ」ことが求められている気がします。思考の原点は学校で習ったのです。

「対話力？」

近頃、社会ではスピーチ力、プレゼンテーション能力が問われるようになりました。対話力や訴求力を向上させるノウ

ハウ本が本屋の店頭にはあふれています。まるで、この能力を身につけなくてはビジネス界では生き残れないと言わんばかりです。

確かに人類が生き抜くためにコミュニケーション能力は大きな原動力になってきました。しかし、上手にスラスラと他人の気を引くように話すことが真に相手に伝わっていることなのでしょう。コミュニケーションとはそんなに単純なものではありません。

座談のうまい人の録音をそのまま活字にして読むと、文章が繋がらないこともあります。それでも聞き手は、その人の話に魅了されてしまうのです。そこには話す人の「思い」があるからです。用意された原稿を読むより、伝えたいことだけを頭においてメモも見ずに話かけたほうが、心を動かされたというスピーチは山ほどあります。

学校は、社会に出るための訓練場、滑走路の役割も持っています。論理的に明瞭に自分の考えを述べることは非常に大切です。ディベート、プレゼンも教える必要があるのでしょうか。話の不得意な生徒、顔をあげて話せない生徒、言いよどんでしまう生徒はよくいます。しかし、彼ら彼女らにも、聞いてほしいことや言いたいことはたくさんあるのです。表現は「うまく」より「心から」を大切にしたいと思います。

私は仕事柄、話し方を教えます。こうするともう少しよくなると伝えます。しかし、最後にいう言葉は決まっています。「声は人、言葉は心」と。



よく学び、よく遊ぶ



役重 眞喜子

(岩手県立大学総合政策学部講師)

略歴

1967年千葉県出身
 東京大学法学部卒業後、農林水産省入省
 農家研修に訪れた岩手県東和町の人と牛に魅かれ、
 1993年東和町役場に転職・移住
 合併後の花巻市で教育企画課長、総務課長等を
 務め、2012年退職
 大学院で地域自治を学び、博士号取得
 現在、岩手県立大学で行政学等を教えるほか、
 花巻市教育委員、コミュニティアドバイザーなど

■著書

「ヨメより先に牛がきた」家の光協会(2000)
 「自治体行政と地域コミュニティの関係性の変容と再構築〜
 『平成大合併』は地域に何をもたらしたか」東信堂(2019)

お粗末な話を告白することをお許しいただきたい。かれこれ 20 年近く教育行政に携わっているにもかかわらず、自ら教壇に立つのは 2 年前に本学に来て初めての体験だ。以来悪戦苦闘の日々を過ごしつつ、恥ずかしながらようやく教育とはどういうことか、教師という仕事の苦労や喜びはどこにあるのか、少しずつだが理解しつつある。もちろん、教えてくれたのはすべて若い学生たちである。

R くん

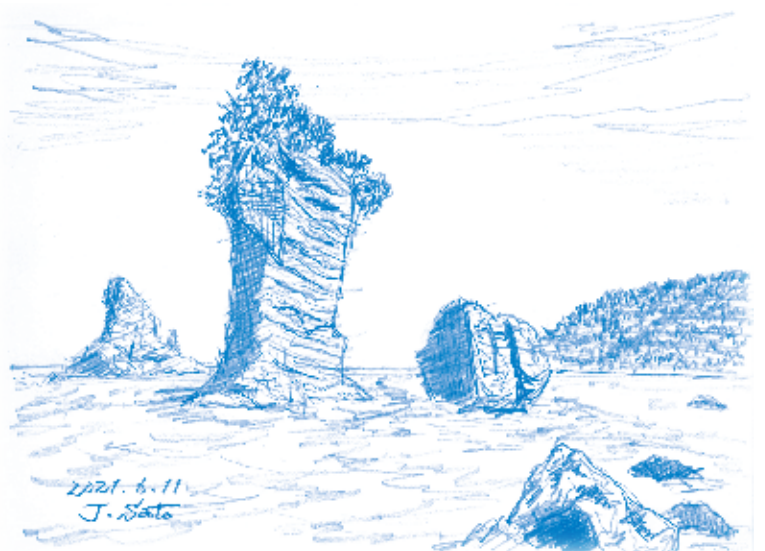
一年目に初めて担任したクラスの中で、彼はひととき無口な子だった。レポートなど書いたものを見れば頭が良い子だとすぐに分かった。が、しゃべろうとすると考えすぎて言葉が上手く出てこないようだった。もうすぐ二十歳という男子学生との距離感を私も測りかね、あまり深く立ち入らずに見守る日々だった。

ある週末、県北の山深い集落にフィールド調査に出かけた。過疎化と高齢化が進んだ地域だ。学生たちが緊張の面持ちで高齢者へのインタビューを終え、お母ちゃんたちが出してくれたのは温かいおまんじゅうやお漬物。最初はもじもじしていた若者たちも次々に手を伸ばし、いつしかパチパチと薪がはぜる達磨ストーブを囲んで打ち解けていた。ふと見ると、珍しい R 君の笑顔。たくあんをほおばったまま皿を離そうとしない。「楽しかった。またおん

でね」と言われ、代表で一言をと頼むと R 君はゆっくり、訥々と言葉を探しながらお礼を述べた。

「最初は、えー山？限界集落？土日つぶれるのかあ？とか、思っていました。でも、皆さんと話してたらとても温かくて、ほっとして——。地域ってこういうものかって。初めて…わかりました」

大事な何かが彼の心に深く届いたことがわかり、嬉しかった。帰路の車中、「R 君のあいさつ良かったなあ」と何気なく言うと、意外なほど嬉しそうに「そうですか？」と弾んだ声が返ってきた。その時初めて気づいた。ああそうか、と。この子はそれを欲していたのだ。素直に、どんどん褒めてあげれば良かったんだ、と。



限界です

サークルの代表から学生会の役員まで、何でもテキパキこなす C ちゃん。しっかり者を絵に描いたような彼女に、ゼミの運営やちょっとした相談など、ついつい私も頼ることが多い。

そんな C ちゃんが弱音を吐いたことが一度だけある。珍しくゼミの課題をやってこなかった日の朝、泣きそうな顔で研究室に現れた。「先生、ちょっと限界かもです…」

サークル、バイトのごたごた、課題、レポートなどが集中し、過労で倒れる寸前だったらしい。良い子と言われ、頑張り屋と言われ、ぎりぎりまでやってしまう子ほど少し気を付けて見てあげなくてははいけない。後ればせながらそう気づいた。

全力で遊び呆けていた自分の頃と違い、今の学生たちは気の毒なほど余裕がない。授業、課題、就活と決められたフローに乗せられ、外れた途端落っこちて戻れなくなる、そんな焦燥に追われている。評価とマニュアルに汲々とするのは、社会に出てからでも十分遅くない気がするのだが…。

コトバとカラダ

「平気っすよ、このくらい」スポーツが得意な H くん、急な山道をずんずん上っていく。おう、元気だったかと顔を見知った地域の方に声を掛けてもらい、嬉しそう。

戦後に樺太から逃れた一団が、苦労の末に山を切り拓いた T 集落。高齢化率が7割にも上り、雪かきなど暮らしの維持は厳しい。それでも山から共同で引く水の美味しさはとびきりだし、開拓の労苦を共にした地域の団結力も魅力で、昨年から学生たちと訪ねるようになった。

先日はその団結のシンボル、T 神社で植樹のお手伝い。学生たちは危なっかしい手つきで鋤を振るが固い木の根に弾き返され、大苦戦だ。

「あああ、そうでねく。こうしてぐっと刃先を入れて、テコの原理で起こす。ホレ！やってみい」

腰の曲がったお年寄りの高スキルに「すご！」と感嘆の声が上がる。小一時間もしてやっと慣れてきた頃、用意された桜の苗木はほぼ片付いた。

「開拓って——」汗だくの首筋をぬぐい、H くんがつぶやいた。「これの何倍も何十倍も大変なんだよな」

お疲れさんとねぎらいながら、自治会長の K さんが話してくれた。「将来ここを、私たちの子や孫が桜を見に訪ねてきてくれるような、美しい場所にしたいんですよ。たとえ、いつかこの集落が消えてしまったとしても——」

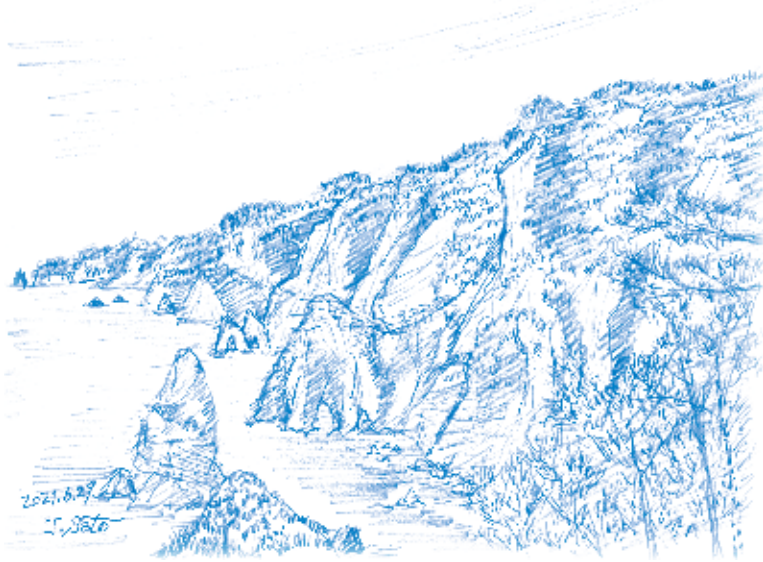
その言葉に、学生たちはしんと静まる。

“限界集落”や“消滅集落”という概念を、彼らは授業で学んできた。人が減るなら仕方ないと、レポートに書いてきた子もいた。しかし教科書上の「コトバ」と、そこに暮らす生身の人々の「カラダ」は違う。概念と体温の間には、言葉にできない大きな落差がある。それを、公務員を目指す者の多いこの子らには肌で感じてほしいと、私はいつも思う。

K さんからメッセージが届いた。

「学生方の熱い想いを知り感激しました。自分もそろそろ会長職を辞退しようかと考えていた所でしたが、皆さんのおかげでもう少し続ける決心がつきました…」

さあ、若者たちよ。今日もよく学びよく遊ぶぞ！





学力テスト今昔

岩手教育総合研究所 所長 佐藤 淳一

2018 年 10 月に、東京大学教育学部の学生が、卒業論文作成のため岩手県教職員組合（岩教組）の資料を閲覧したいと訪ねてきました。テーマは「1961 年の全国学力テスト反対闘争について」とのことでした。どういう問題意識なのか尋ねると「岩手が北海道、高知などとともに阻止率が高かったのは、へき地指定の学校が多かったからではないか」との仮説だといえます。

私も、闘争の概要は岩教組の 20 年史や 50 年史で読んでいたものの、直接体験がないので、当時を知る 80 歳代の先輩にお話を聞く機会を持ちました。そこで語られたのは、「学テ反対闘争」は、「岩教組が点数学力による差別・選別に反対し、強い団結力を示した取り組みだった」と一面的に理解していた私にとって意外な証言でした。

先輩たちの話によれば、「教育条件も整わない中で全国一斉のテストで比較・序列化が行われるという差別への反対は強かったが、必ずしもへき地が多かったからということではない。岩教組の団結力もあったが、むしろ地域での話し合いで、保護者や地域の方からの反対が強かった。1960 年代始めといえば、戦後まだ 10 数年しか経っていない頃だが、復員者や満州からの引揚者など多くの方々が、地域の戦後復興の担い手を進学で都会に送ることに強く反対したのだった。また、学力テスト反対闘争だけが単独であったのではなく、勤務評定、主任制、学習指導要領など、教育への支配・統制が強まることへの抵抗の流れの一つだった・・・」というものでした。

私は、60 年近く前のことを聞きながら、現在の学校の状況について考えさせられました。

先輩たちは、政府の高度経済成長政策を背景とした人材開発に向け、テスト結果が子どもの進学・就職に利用されるという弊害を許さないために、職と良心をかけて反対し闘いました。その後、全国的な運動によって学テ批判の世論が高まり、文部省も全国一斉調査に弊害があることを認め、65 年には抽出調査になり、66 年について中止に至りました。

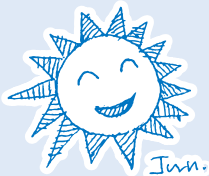
しかし、現在ではいわゆる点数学力偏重の状況が広がり、自由で創造的な教育実践ができにくい状況が常態化してはいないでしょうか。「競争を持ち込めば効果が上がる」という安易な成績主義は、子どもたちの健全な発達を阻害します。

国連子どもの権利委員会からは、日本政府に対して「競争的な学校環境が就学年齢層の子どものいじめ、精神障害、不登校、中途退学および自殺を助長している可能性があることも懸念する」との勧告も出されています。

しかし、19 年 1 月にジュネーブで行われた委員会での日本政府の態度はそれを無視するもので、審査の場でも「競争的環境は解消した」との説明に終始しました。これに対して、委員会からは、「過度に競争的システムを含むストレスの多い学校環境から、子どもを開放するための措置を強化する」よう、再度勧告されています。

今、もう一度、学校において「子どもを主体にすること」「子どもの側に立って考えること」「子どもの最善の発達を保障すること」などを問い直しつつ、そのために教職員は何をすべきかを考え、実践していくことが必要となっていると思います。

戦後復興と震災からの復興、時期と状況は違っても、地域の将来の担い手をどう育てていくかという観点で、当時の地域・保護者・教職員の決意に学ぶべき点があるのかもしれない。



教室の窓から



金髪 of 意外な理由

5 年間の県北勤務を終えて M 市に戻って 2 年目、S 中学校で持ち上がりの 3 年生担任になって 1 ヶ月ほどしたある日の朝のことだった。

「先生、K の頭が大変です・・・」と、クラスの生徒が職員室に駆け込んできた。

それは朝の会が終わり、創立 50 周年の一環で、全校生徒による人文字の航空写真撮影のために校庭に移動しようとしていた時だった。K は朝の会の時にはまだ登校していなくて、家に連絡しようかと思っていたところだった。

「K の頭がどうした?」

「金色です!金髪に染めたみたいです。」

教室に戻ってみると、K がカバンを棚にしまおうとしているところだった。

「K、その頭どうしたんだ?」

「どうした?って、別に・・・。」

「別について、とにかく事情を聞かせてくれ。」

K は、さほど抵抗もせずに職員室と一緒についできた。そして、私と学年生徒指導担当の M 先生とで彼に事情を聞くことになった。しかしその時には、それから 6 時間も彼の話を聞くことになるとは考えもしなかった。

時々黙り込む彼を促しながら聞き出した「事情」は、小学校 2 年生まで遡ることになった。

2 年生の時に両親が離婚したこと。1 年生までは勉強も好きだったが、家が落ち着かず集中できなくなったこと。3、4 年生の頃にやり直そうとしたが挫折したこと。父親を「ミルク代までパチンコにつき込んだ」と非難していた母親が、離婚後は K の小遣いまでパチンコ代に充てるようになったこと。学区外通学のため近所に友達もなく、寂しい思いをしていること。勉強も運動も苦手で、みんなからもバカにされるため学校に来るのもイヤなこと。卒業後のことも気になり始めたが、誰にも相談できずにいること。・・・etc.

話が一区切りついたところで K に聞いた。

「ところで最初に戻るけど、どうして金髪に染めてきたんだ?」

「だって言っても笑われるだけだし・・・」

「笑わないよ。約束するよ。」

K はポツリポツリと話し始めた。

「オレ、県で一番合格が難しいっていう進学校を受験しようかと思ってさ。」

「えっ?」

「この前進路希望調査の時に、先生は『諦めずに目標を高く持とう』って言ったじゃん。」

「そうだったな。だけど、それと金髪にすることとどう関係あるの?」

「だってさ・・・、先生たちは県で一番合格が難しい学校の生徒が、何やったってどんな格好をしたって怒らないんでしょ。だからさ、オレもまず自分をそういう状態にして、それからその学校に入れるように勉強を頑張ろうと思ってさ・・・。」

「・・・!?」

理屈としては全然合理的ではないが、彼なりに考えてのことだったのだろうと思い、頭ごなしに否定することは思いとどまった。

「そうか、でも見かけが先じゃなくて、まず自分の中身をどこに行っても自信を持てるようにする方が先だと思うよ。そのために必要なことを、一緒に考えて準備していこうな。」

K は、すっかり力が抜けてソファにしょんぼりと座っていた。気が付けば、もう夕方に近くなっていた。M 先生が、「K、今から床屋に行こう。」と声をかけてくれた。K は、黙って立ち上がった。

彼の生い立ちや、家庭環境を変えることはできない。私たちには、生徒たちに寄り添って話を聞くことができるだけだ。自分の将来を切り拓くことができるのは彼ら一人ひとりなのだから、その自立ができるように、可能な限りの支えになろうと改めて思ったのだった。(J)



IWATE 教育総研ニュースはホームページにも掲載しております。

<http://www.iwakyoso.gr.jp/soken/index.html>



QRコードは
コチラから!

